九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[34_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 : 34(4)

https://doi.org/10.15017/1470458

出版情報：図書館情報. 34 (4), pp.66-86, 1999-03-31. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

ISSN 0454-8213

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin Vol. 34, No. 4 (1999)

目　　次

・週に一度は図書館に行こう ……67
・ロートマール文庫目録の刊行に寄せて ……70
・ソウル大学校中央図書館訪問と今後の相互交流 ……72
・アメリカの医学図書館ネットワークシステム
　－海外研修報告－ ……75
・「長崎八景」展示会を開催 ……77
・〈新入生に薦める本〉
・　人類進化についての読書のすすめ『Lucy's Child』 ……78
・　山本七平著『日本的革命の哲学』 ……79
・　心に刻むこと－『岩波ブックレット』 ……80
・先輩から新入生のみなさんへ ……81
・講演会及び研修会を開催 ……82
・平成11年度附属図書館開館等スケジュールについて ……83
・休日における図書館利用状況（平成９年度） ……84
・自著紹介 ……86
・本学関係者著作寄贈図書 ……86

週に一度は図書館に行こう
－新入生のための図書館案内－

■

附属図書館長
有川節夫

皆さんご入学おめでとうございます。

これから、４～６年間、大学院博士後期課程まで進む人は、９～10年間にわたる大学での学習と研究の生活が始まります。入学式に続いて、全学、各学部、各学科等で、大学生活に関する様々なオリエンテーションがもたれたことと思います。ここでは、大学図書館について簡単に紹介することにします。

古くから、大学は真理を探求するところである、といわれています。この「探求する」あるいは「探索する」ということは、これから皆さんに生涯つきまとうことになると思います。そしてそのことに、当然図書館が深く関わってきます。最近では、大学は、学問文化を蓄積して、新しい知識を創成し、教育等を通してこれらを伝承させるところであるとい

われています。ネットワーク社会における大学には、こうした情報や知識の「蓄積」、「創造」、「発信」の機能を効果的に連携させることが求められています。ここでも、大学図書館が深く関係します。したがって、図書館は、これから始まる皆さんの大学生活において、その中心に位置づけておくべきものといえるでしょう。

さて、九州大学の附属図書館は、大正11年に九州帝国大学附属図書館として設置されて以来、77年にわたる歴史をもっています。この間に、大きく発展し、現在では、多くの図書館や図書室があります。大きなものは、箱崎にある中央図書館と皆さんが入学後すぐ使うことになる六本松分館、それに医学分館です。この他に、各学部、研究科、学科、専攻単位での図書室が沢山あります。これらを総称して附属図書館といいます。

蔵書は、約327万冊あります。このうち、約179万冊が和漢書で、残りの約148万冊が洋書です。九州大学には、大学院の学生を含めて約16,200人の学生と約2,200人の教官がいますので、一人当たり約180冊ということになります。他に、学術雑誌が約60,000種類あり、このうち、約25,000種類を毎年受け入れています。

こうした図書・雑誌は、文部省からの学生用図書購入費や教官の研究費等を使って購入していますが、教官の研究費の占める割合が圧倒的に多い状況です。教官達は、非常に限られた研究費を割いて、自分達の研究だけでなく新しく入ってくる学生や研究者のために、こうした書籍を購入しています。その費用は、九大だけで年間8億円を超えています。

大学図書館には、実に様々な図書資料があります。非常に貴重な書籍もあります。古文や歴史の授業などで出てきたような有名な書籍も多数あります。専門的な図書になりますが、大型コレクションと呼ばれるまとまりのある蔵書も多数集められています。また、最近では、それぞれの授業の概要を書いたシラバスに載っている参考書等もほとんど揃っています。ビデオテープやCD-ROM等の電子媒体の資料も増えています。学部や学科等の図書館室には、新しい専門書が中心に配置されています。医学分館は、全国医学・生物学系外国雑誌センター館として指定され文部省からの特別な予算によって、世界中の関連分野の雑誌が網羅的に収集されています。

現在はネットワークの時代です。図書館内にも、台数は十分とはいえませんが、インターネットに接続できるパソコンが設置されています。また、大型計算機センターの情報サロン分室も設けられる予定です。そこにあるパソコンや情報処理教育センターのパソコン、自分のパソコン等を使って、まず、この図書館情報の裏表紙にも記載されている附属図書館のホームページ(http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html)を開いてください。実際に使ってみればすぐ分かることですが、そこから、「News&Topics」をはじめ「資料検索・閲覧」、「図書館案内」、「電子展示」、「関連サイト」等へ飛び、必要な情報を得ることができます。「図書館案内」からは、中央図書館や各分館へ飛ぶことができ、開館時間や利用案内などを知ることができます。また、「資料検索・閲覧」からは、「蔵書検索OPAC」(Online Public Access Catalog)や「多機関OPAC横断検索」、「Webcat」、「Web of Science」へ飛び、学内(OPAC)だけでなく、他大学で所蔵している図書・学術雑誌(多機関OPAC、Webcat)の所在情報を探すことができます。OPACには、比較的新しい図書は原則としてすべて登録されています。古い図書のデータの入力作業も進んでいますが、見当たらないときは、図書館の図書カードを繰ってみてください。それでも、欲しいものが本学にない場合には、「Webcat」で所在を調べ、必要な手続きをして、それを所有する他の大学からコピーを取り寄せたり、借り受けたりすることもできます。

本学が全国の大学図書館にさきがけて導入した「Web of Science」や本学の医学系研究者の研究業績を集めた「Collected Papersデータベース」、「九州大学研究者総覧」により、本学だけでなく世界中の研究者の研究活動を知ることもできます。さらに、「電子図書館資料の検索・閲覧」からは、本学が所蔵する貴重資料の画像を閲覧することもできます。「関連サイト」からは、内外の大学図書館等へ飛び、情

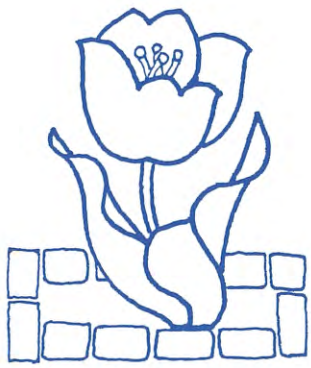
報を得ることができます。図書館や図書資料に関する探索のために、まず本学の附属図書館ホームページを訪問することをお奨めします。

このように、インターネットに代表されるネットワーク時代の恩恵を享受でき、旅行に必要な地図や時刻表、所在情報だけでなく、論文そのものさえも居ながらにして手にいれることができる時代になりました。しかし、図書館に直接足を運び、そこで探し、学習し、調べものをすることは、時代を超えて重要な行為であるように思います。そのために閲覧室があります。中央図書館で約650席、六本松分館で約720席、医学分館で約260席の座席が用意されています。閲覧のための机にも配慮し、目的にあった机が選べるように工夫しています。ほとんどの閲覧室は、直接、図書に接して選ぶことのできる開架式閲覧室になっています。また、最近、開館時間を延長しています。中央図書館と各分館によって多少の違いはありますが、平日は、通常夜8時（中央図書館、六本松分館）から9時（医学分館）まで利用でき、通常休日も開館しています。

どの図書館も試験の時期には利用者が多く、閲覧室は試験のための勉強をする学生で満席状態になります。年間の利用者数は、中央図書館と2つの分館だけで約61万人です。蔵書数から推定して、これと同数以上の人が各部局図書室等を利用していると考えられますので、年間125万人程が附属図書館を利用していることになります。このうち、皆さんがこれからの1年半あるいは2年の間に主に使う六本松分館の利用者は、年間18万5000人です。六本松キャンパスには他に大学院学生がいますので、その数も勘定にいれると、平均して1人の学生が6日に1回は図書館を利用していることになります。ですから、1週間に1回も図書館に行っていないようであったら、勉学が疎かになっていると考えた方がいいかも知れません。入学当初から、1週間に一度は、何か具体的な目的をもって図書館に行くことを習慣付けてみましょう。

また、時には何の目的もなく図書館に行き、静かに書庫を歩き、時折本を取り出してみてください。時を経た膨大な書籍や新しい書籍達が、静かに何かを語りかけてくれることでしょう。思いがけない発見もあるでしょう。そして、新たな勉学の意欲も湧いてくることでしょう。

（ありかわ せつお　大学院システム情報科学研究科教授）



ロートマール文庫目録の刊行に寄せて

西 村 重 雄

長年の懸案であったロートマール文庫の冊子体目録が、遡及入力作業計画の実行の中で完成し、近く刊行の運びとなったことは、関係者の1人として大変有難いことである。刊行にまつわるいくつかの事項につき、この紙面を借りて記すことにする。

フィリップ・ロートマール Philippe LOTMAR (1850-1922) は、19世紀半ばドイツのパンデクテン法学の代表的学者ブリンツ Alois Brinz 門下の俊英であり、1888年よりその没年に至るまで、スイスの首都に所在するベルン大学法学部教授であり、人望厚く、重ねて法学部長を勤め、さらには同大学総長(1897/98年)を歴任した。主としてローマ法および労働法(労働法学の創始者の1人とされる)において優れた業績を生み出した碩学である。ドイツの学界では、ロートマールが、弾圧の対象となった社会民主党に敢えて入党していたこと、また、ユダヤ系であったこともあり、不遇に甘んじざるをえなかった。また、その労働法学は、その後主流となった H・ジンツハイマーなどの労働者保護特別法説とは異り、私的自治論を基礎に構築されていたため、長らく疎んぜられ、近時に至り私的自治論の見直しの中で、その労働法理論が M・レービンダー、J・リュッケルト両教授により再評価されているという事情にある。

ロートマール文庫を九州大学が所蔵していることは、ごく限られた人々にのみ知られていたと思われる。ローマ法の研究に携わる中で、小生も早くからその名はベルン大学の教授として立派な論文を書かれる方として記憶に残り、引き続き注意はしていたものの、本学への赴任まで、文庫の存在をうかつにも知らなかった。法学部書庫に混配されたその蔵書の重みを知るのにあまり時間はいらなかった。重要と考えて借用する19世紀ローマ法文献の殆どが、内表紙右肩部分に[ロートマール文庫]という小型の印があり、欄外にしばしば特色ある字体での書き込みに出会いその方への敬慕の気をもつに至ったからである。

フランクフルトおよびパリで商業・銀行を営んでいた資産家を父親としていたという背景ではじめて、豊富な個人蔵書の謎が解けることである。クジャス、ドノーといった人文主義法学の巨匠のそれぞれ10巻を超える全集をはじめ、ハイムバッハ版バシリカ法典など、今日でも有用なものを含んでいるのも魅力の1つである。

今からすれば十年よりも前、かねて存じ上げていたリュッケルト教授から、ロートマール文庫の所蔵の確認およびカタログ送付の依頼をうけたのは、若曽根健治教授(熊本大学法学部)の仲介による。ミュンヘン大学法学部 St・ガクニエ教授のゼミでの若曽根教授の発言ではじめてリュッケルト教授の知るところとなったという次第である。受入台帳のコピーの送付、同教授の来日調査(1991年3月)と続き、冊子体目録刊行の必要を一層強く感じた。また、暫くしてレービンダー教授もロートマール文庫のためにわざわざ福岡まで足を運ばれ、労働法を専攻で当時法学部長であった菊池高志教授が御案内された、と伺った。

以上のような経緯があるので、小山勉前図書館長のもとで、中央図書館による平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(データベース)の中に、ロートマール文庫の遡及入力が含まれていたこ

とは大変幸いであった。外部委託による入力とはいえ、法学部図書掛の方々が多忙な業務の間をぬって、丹念な点検作業をして頂いたことには、頭の下がる思いであった。しかし、こうして完成された目録を拝見すると、文庫の所在と内容が一目瞭然となり、利用していただく方が着実に増加するものと思われ、感謝の念にたえない。

もっとも、現在の時点では、文庫購入の事情が殆ど未詳のままであるのは残念である。ロートマール文庫は受入台帳において、大正15年11月18日および12月10日、登録番号22162～22734および23296～23475として受入れられたと思われる。「購入先（寄贈者）」欄には「井口孝親氏」の名前が記載され、価格欄には殆ど各本に5円という同じ価格が付せられている。井口孝親氏は大正12年文部省より在外研究員として欧州出張を命ぜられ、留学中の大正14年に新設の法文学部の社会学助教授に任命されたが、その後病気療養を強いられスイスに長期の滞在をされ、昭和4年1月に帰国されたことが分かっている。

井口教授の早逝（昭和7年10月没）もあって、詳しい事情が伝わらなかったことが十分考えられる。（ちなみに、日本の労働法学の開拓者である菊池勇夫教授の尽力という推測も思い浮かぶが、その着任に先立つ購入であり、御令息であられる菊池高志教授も父君からそのことについて伺われたことはない、とのことであった）

また、今回の刊行の目録は、凡例に記載のとおり「現法学部所管の単行本」を対象としており、他部局に所管のもの若干並びに、雑誌・判例集などの逐次刊行物は含まれていない。

第1次世界大戦でのドイツの敗北と政治の転換は、忠実なドイツ国民であり続けたロートマールの晩年に大きな影響を与えた。敗戦後バイエルンで成立した「レーテ共和国」からロートマールは司法大臣就任について打診を受けたという。他方、より深刻であったのはロートマールの購入した多額のドイツ戦時国債が無価値となったことである。家族は厳しい生活を強いられ、令息が同じ専門でないこともあって、没後まもなく蔵書も手放されることになった。そして（その経過はすでに述べたようによく分らないが）、創設間もない九州大学法文学部の所蔵に帰することになった。

碩学の遺文庫の移動は（クンケル文庫目録のD・ネル教授の序文の表現を借用すれば）「まだ書かれていない学問史の1つ」に属する。いずれにせよ、九州大学の内外の研究者がこの文庫のより多くの利用により研究を深めることが、最も肝要なことと思われる。冊子体目録の刊行が、その1つの契機となることを切望する。

ちなみに、先年のクンケル文庫目録の送付先での、分類、カード、配置場所は、大学毎に実にさまざまで、このような著書性の明白でない書籍の数奇な運命をあわれんだことであった。今回のこの目録は、各大学においてコンピュータ検索により、Lotmar, Philippe で画面に立ちどころに現れるものと期待する。

（ロートマールの生涯に関する記述は、M. Rehbinder (hrsg.) : Philipp Lotmar, Schweizerisches Arbeitsvertragsrecht, 1991 Zürich（冒頭にロートマールの肖像画を掲載）および、J. Rückert (hrsg.) : Philipp Lotmar, Schriften zu Arbeitsrecht, Zivilrecht und Rechtsphilosophie, Frankfurt am Main, 1992に負うことを付記する）

（にしむら　しげお　法学部教授）

ソウル大学校中央図書館訪問と今後の相互交流

熊　谷　俊　夫

1999年に年が改まって早々の1月8日9日の両日、九州大学附属図書館の一行が厳寒のソウル大学校中央図書館を訪問した。メンバーは附属図書館から有川館長、深川閲覧掛長、古賀電子情報掛長と筆者の4人及び今西文学部教授、松原言語文化部教授の計6人である。松原教授には、ソウル大学校との諸連絡や訪問中の案内と通訳一切のお世話をいただいた。図書館視察の詳しい報告＊は別に譲ることとして簡単な報告と、あわせて、ここ半年間程の両図書館間の相互の交流のあらましについて記すこととする。

今回の訪問のきっかけは、前年9月に行われた松原教授を団長とする九州大学古典籍調査団によるソウル大学校中央図書館所蔵の和古書の所蔵調査の実現を端緒とする。この蔵書は旧京城帝国大学から引き継がれたもので、いくつかの新聞にも報道されたように、二十年来所在調査の許可を求めながら実現されなかったが、秦教勲中央図書館長の「歴史的な経緯がどうであれ、本は人類の共有財産であり、必要とする人に公開するのが図書館の務め」とするご理解と英断によって初めて実現したものである。

それから間もなくして、秦館長が九州大学訪問のため来日という機会があり、11月9日には、杉岡総長表敬訪問のあと本学附属図書館において秦図書館長の講演会の開催が実現した。「情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割について」と題する講演全文は本誌前号に掲載のとおりである。

講演会に引き続いて、附属図書館主催による研究開発室研究会も関係者を集めて開催された。両大学の図書館の電子化に関して秦館長および有川館長からそれぞれ報告があり、情報交換と意見交換が行われた。竹田室員からは、和歌の中のことばの使われ方の頻出度に関する調査研究の発表もあった。秦館長から初めて紹介されたソウル大学校図書館電子化の現況は我が国のそれに比較して相当に進展しており、機会があれば実際に見ておく必要性をわれわれに感じさせた。秦館長の熱心な説明により予定の時間を越えて研究会は終了した。構内の六角堂においてささやかな懇親会も開催されたが、秦館長は、早朝からの極めてハードなスケジュールを少しも疲れを感じないかのように精力的に一日の日程をこなされたのも印象深いことであった。

さらに、11月30日には、金鍾泌大韓民国国務総理が九州大学を訪問され、記念講堂において、「韓日関係の昨日と明日」と題する特別講演が行われた。日本語で行われた講演は、1,500余名の本学学生及び教職員に対して深い感銘と印象を与えた。出席した図書館職員にとっても韓国に対する理解をさらに増進を深めるものとなった。

ソウル大学校訪問

ソウル大学校は、約30年前、市街地にあった学部、研究所を医学部、農学部を除きソウル市南部の冠岳地区に移転した。冠岳キャンパスはたいへんな丘陵地にある。キャンパスに到着して起伏に富んだ地形に展開する大学建物群をみたときの最初の印象は、いま本学でキャンパス移転計画が進められているが、移転後の九州大学新キャンパスの光景を思わせるものであった。キャンパス内はゴミなど全く落ちてなく、周辺の環境整備はどこも行き届いておりとても美しい。

注）＊海外大学図書館等視察報告　第4集　　平成11年3月　九州大学附属図書館

中央図書館

中央図書館はキャンパスのほぼ中央に位置し、6階建てで広さは3万㎡を越える大きな建物であり、閲覧席は約4,200席もある。本学中央図書館と比べると広さにおいて2.2倍以上、閲覧座席数は6.4倍以上の恵まれた収容力である。周辺の各研究棟からユーザーが歩いて5分くらいで来れる距離に建設されたとのことである。図書館の北側斜面を下った隣には大学事務局庁舎が、西隣には学生関係の建物群が配置されており、学生の人口の多いゾーンに配置されている。図書館建物の3階部分を広い通り抜け通路が縦貫しており、来館するユーザーのみならず、学内の人の動線を図書館建物が分断することなくスムーズにしている。

冠岳キャンパス内にはほかに、規模はそう大きくない社会科学、経営科学、法学分野の分館があり、医学、歯学、及び農学の分館は市街地にある。

秦館長表敬訪問

秦館長にはちょうど2ヶ月ぶりにお目にかかる。本学附属図書館が刊行した蔵書目録や文庫目録類を数点贈呈する。館長室において図書館案内ビデオを視聴する。映像はまるでＣＮＮの放送番組を見ているようなすばらしい出来ばえの図書館案内ガイドである。

つづいて会議室に移り、秦館長はじめ各セクションの課長等の幹部6人が出席し、話し合いの場がもたれた。ソウル大学校図書館の諸業務の状況について、とくに利用者サービス、蔵書の構築の充実方策、電子化の状況、図書館職員の育成、国内の学術情報ネットワークなどについて詳しく説明を受け、質疑応答が行われた。

館内視察

全学の蔵書は212万冊、所蔵する雑誌13,400種である。大学全体で重複受入れを極力排除し計画的に調整された蔵書構築に努めているから、重複購入の多い本学の320万冊の蔵書構成とは本質的に異なる。その全学の蔵書はすでに入力されオンラインカタログ化（SOLARS）されており、カード目録ケースは姿を消している。図書館ホームページ SOLARSnet により電子化資料や内外の学術情報源にアクセスできる。館内には150台余の検索用パソコンが置かれており潤沢である。それらのパソコンはＯＰＡＣコーナーや利用者教育用の室内にも十分な台数が配備されている。情報支援室では50台のパソコンが置かれ、主に二次資料データベースや CD-ROM など電子化資料が利用できる。学内 LAN で提供している CD-ROM は30余種も用意されており、First Search、UnCover、DataPro、BIOSIS Previews など10余種の海外の大規模なデータベースを導入している。そのうちの IDEAL（Academic Press）、Web of Science（ISI）、Search Bank（IAC）などのデータベースはソウル大学校中央図書館が主管して韓国大学コンソーシアム（KUCED）を形成して低廉な価格で購入している。このコンソーシアムには45の国公立大学が加入している。資料費の節約のみならず国家予算の外貨節減を目的としているとのことである。以上のほかにホームページからリンクされ利用できる海外の電子ジャーナルも約2000種ある。

すべて図書館にアクセスすることにより網羅的な学問領域の世界中の膨大な学術情報が入手出来る。大学の図書資料購入費を図書館に一元的に集中するという予算制度によって、大学が必要とする情報を計画的に収集することが可能となっている。

6階には前述の旧京城帝国大学時代から引き継がれた約31万冊の蔵書がそのまま整然と保管されている。朝鮮戦争時には蔵書の一部を釜山まで疎開させるなど、当時の図書館職員による献身的な責務によって貴重な蔵書が守られたのだという。

閲覧室は使用目的に応じて6室ほどあり個別に配置されており、大学院生専用閲覧室もある。図書館の利用時間に関係なく、開室時間はほとんど朝6時から夜11時までであり、24時間開室している閲覧室もある。各閲覧室内の閲覧席はいずれも満席であり、韓国の学生は実に良く図書館で勉学するそうである。

そのほか、参考図書室のレファレンスコレクション類が充実していること、利用者に対するデータベースなどの教育システムが整っていること、入口正面案内には最もベテランの司書を配していることなどが印象に残る。

交流協定締結に向けて

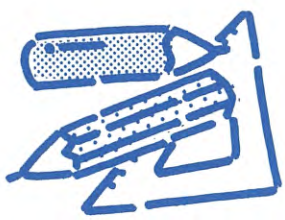
教授会館会議室において、今後の両図書館間の交流協定締結に向けての話し合いが行われた。昨年秋に秦館長が来学し杉岡総長を表敬訪問された際、有川館長から交流協定締結の話題が出されていたものである。有川館長から交流協定書案が提示され、秦館長との間で各事項の細部について周到に話し合いが時間をかけて続けられた。その結果、図書館利用、刊行物の交換、共同開発計画、図書館職員の交流などにおいて交流・協力計画を推進していくことについて双方合意に達した。今後、両大学において締結に向けて努力することが確認された。

両大学図書館間の真の交流、協力はこれから始まる。

（くまがい　としお　附属図書館事務部長）

九州大学とソウル大学校の図書館交流協定の締結について

ソウル大学校訪問後、平成11年2月5日㈮に開催された第168回附属図書館商議委員会において標記交流協定締結について審議された結果、交流協定案は承認され、国際交流委員会に諮ることとされた。さらに、国際交流委員会第一専門委員会及び2月19日㈮開催の国際交流委員会においても同案は了承された。一方、ソウル大学校においても諸手続が3月中旬までには終了し、大学総長の了解が得られたとのことであり、図書館交流協定は3月末日までには締結される予定である。



アメリカの医学図書館ネットワークシステム
ー海外研修報告ー

大 瀧 礼 二

昨年11月に「九州大学創立八十周年記念事業国際交流基金による事務系職員の海外出張」によりアメリカ合衆国を訪問する機会を得た。主な訪問地はオハイオ州コロンバスとワシントンD.C.の2ヶ所だったが、ワシントンD.C.を訪れた際、メリーランド州ベセスダにあるアメリカ国立医学図書館(National Library of Medicine:NLM)を訪問した。

NLMは、機構上は日本の厚生省にあたるNIH(National Institute of Health)の一組織という位置付けになっている。医学系の研究者にとって最も重要な書誌情報源であるMEDLINEをはじめ様々なデータベースを作成しており、世界的に有名な機関である。またその他にも多様なプロジェクトを実施し、医学図書館や医療従事者の情報収集活動を支援している。医学図書館に勤務する図書館員にとってNLMは特別な存在であり、ワシントンD.C.を訪問地に決めた際、そこから程近いNLMは迷わず訪問先の一つに選んだ。

NLMを訪問した際、アメリカの医学図書館のネットワークシステムについてのお話を伺うことができた。日本には類のないシステムであり興味深い内容であったので、入手した資料やホームページ上の情報をもとに、以下に簡単に紹介したいと思う。

大学や大規模な病院に所属していない医療従事者が必要な医学情報を入手したいと思った場合、日本ではそのためのシステムが未整備であるために、十分なレファレンスサービスやドキュメントデリバリーサービスを受けられないことが多いと思われる。図書館側としても、こういった場合どのように対応するかはケース・バイ・ケースで判断しているのが実状であろう。これに対してアメリカでは、NLMがその主要な任務の一つとして医療の最前線で働く医療従事者への支援を掲げており、このことを目的にNational Network of Libraries of Medicine (NN/LM)と呼ばれる全米の医学図書館のネットワークシステムを構築している。

全米には約4,500の医学図書館があり、それらの図書館が系統的に整備されNN/LMを構成している。それらの多くは病院附属の小規模な図書館・室であり、現場の医療従事者が最初に利用する図書館ということでPrimary Access Library (PAL)と呼ばれている。この上に、こういった小規模な図書館の活動を支援するために、Resource Library (RL)と呼ばれる規模の大きな図書館がある。RLは主に大学の医学系図書館で、全米で約140の図書館がRLとされている。さらにその上に、全米を8つの地域に分けて各地域にRegional Medical Library (RML)と呼ばれる図書館を配置し、RMLが担当地域の図書館や医療従事者を支援する役割を受け持つことになっている。そして、このような階層構造の頂点にNLMが存在している。

NN/LMの活動を紹介するパンフレットによると、NN/LMが提供する主なサービスは以下のようなものである。

- 所属や地域を問わずすべての医療従事者が必要な情報を入手するための支援を行う
- MEDLINEをはじめとするデータベースを簡便に利用できる形で提供し、利用のための教育を行う
- ドキュメントデリバリーサービスやレファレンスサービスを提供する

・インターネットへの接続のための支援を行う
・新しい情報伝達技術の紹介を行う
・各地で開催される会議等でNN/LMのサービスについての展示等を行う

NLMからRML、RLそしてPALに至るまでの図書館が各々に期待される役割を果たすことによって、NN/LMとしての上記のようなサービスの提供が可能になっているのである。

このようなNN/LMの活動の中心になるのはRMLである。RMLには固定された図書館が継続して指定されるような形がとられるのではなく、NLMとの5年単位での契約制になっており、5年ごとに審査を経て選出される。現在は1996年から2001年までの契約期間中である。RMLの選出は、NLM内に設けられたレビューチームが応募館の提出した提案書を審査する形で行われ、一連のプロセスに3ヶ月から6ヶ月をかける大がかりなものである。一つの地域で複数館が応募するのはそう多くはないらしいが、前回の選出時には3つの地域で各2館の応募があり、それぞれ1館が選出されたとのことである。RMLとしてのプロジェクトを行うための予算は各館に毎年（50〜70万ドル）提示させ、更改して配分される。

RMLが実施するプログラムは大きく分けてBasic NetworkプログラムとOutreachプログラムの二つである。Basic Networkプログラムは、Inter-Library Loan（ILL）サービスやレファレンスサービスといった、図書館にとって基本的なサービスを広く行き渡らせるためのプログラムである。RMLとしての仕事の力点はそのための基盤整備におかれているようであり、例えばなるべく多くの図書館をNN/LMのメンバーに加えるための計画を立てたり、担当地域内の図書館の雑誌所蔵データのメンテナンス業務を管理するといったことを行う。また、担当地域内の図書館についてのプロファイルやそれらの図書館が行っているサービスについてのデータを集めたデータベースを管理したり、地域の代表館としてNLMや他の地域の様々な図書館との交流の窓口となる役割も担っている。

一方Outreachプログラムは、よりダイレクトに医療従事者やPALの情報収集活動を支援するプログラムである。先に紹介したパンフレットの記述と重複するものが多いが具体的な例をいくつか挙げると、医療従事者やPALがインターネットに接続するための支援や利用教育を行ったり、組織に属さない医療従事者に的を絞った支援プログラムを作成し実施したりする。また、各地で開かれる医療従事者を対象とした会議などで、NLMやNN/LMのプログラムやサービスを紹介する展示・プレゼンテーションを行うことも主要な任務の一つである。これらのプログラムを通して、RMLはNN/LMの各地域での要としての役割を果たしているのである。

NLMが提供しているサービスは我が国から見れば質・量ともにため息がでるほど圧倒的なものであるが、紹介したNN/LMはこういったサービスを支える土台になるものと言えよう。華やかさのあまりない地道な活動が必要なプログラムであるが、果たしている役割の重要性に大きな感銘を受けた。

（おおたき　れいじ　医学分館参考調査掛）

アメリカ国立医学図書館（右）
左手後方のビルは研究部門が入っているリスターヒルセンター

アメリカ国立医学図書館の閲覧室（Reading Room）入口

「長崎八景」展示会を開催

中央図書館では平成11年2月2日㈫から3月26日㈮の間、中央図書館玄関ホールにおいて、平成10年度第4回中央図書館貴重図書展示会「長崎版画の長崎八景」展を開催しました。

長崎版画は、正保2（1645）年に長崎で開板された「万国人物画・万国絵図」が最初と言われていますが、文化文政のころ江戸版画の隆盛に影響されて流行しました。長崎絵とも呼ばれ、豊島屋、富島屋、文綿堂、大和屋、益永などの長崎港町の版元からつぎつぎに新版が開板されました。長崎版画は在来の浮世絵と全然趣が異なり、美人画、若衆もの、芝居絵がなく、異国情緒の文化的要素を含むものが多いと言われています。今回、展示した長崎版画は中でも珍しい長崎の当時の風景を現した「長崎八景」と呼ばれているものです。

立山秋月

稲佐夕照

新入生に薦める本

人類進化についての読書のすすめ

「Johanson, D. and Shreeve, J. Lucy's Child. William Morrow Publishers. 1989. 318p.」

高橋孝三

ジョハンソンとシュリーブによって書かれた「Lucy's Child」は、東アフリカ・サバンナ帯のセレゲッティ草原に繰り広げられた人類発展の歴史を綴った感銘深い書である。是非講読を推奨する。本書はアフリカ大陸における人類発祥とその進化に関する入門書とでも言うべき位置付けができる。本書は一般向けに平易に書かれており、専門用語は極めて排している。ジョハンソン博士はアメリカ・カリフォルニア州、バークレーにある人類発祥研究所(Institute of Human Origin)長であり、永年古人類の研究を重ねてきた著明な学者である。シュリーブ氏はサイエンスライターとして何冊かの古人類に関する本を書いた経験もあり、ベテラン作家である。このかけがえの無いチームの合作である本書は、その英語の表現の美しさもさることながら、読者に素朴な質問を自然に促す特異性をもっている。例えば、「我々とは一体何なのだろう？」とか「我々の感情や心はどのように進化してきたのだろうか？」とか「我々の将来はどうなるのだろうか？」などである。自分自身のルーツや将来を知りたいと思うのが人情であろう。

本書の主人公の母親とでも言うべき「ルーシー」とは、1974年当時オハイオ州のクリーブランド自然科学博物館にて活躍中のジョハンソン博士の率いるチームがエチオピアで発見した猿人 Australopithecus afarensis のほぼ完全な骨格標本のことである。本書ではこの標本に関する現場での発掘から研究室でのデイスカッションの詳細をまず紹介し、さらにその後発見された幾多の古人類骨格に関しての議論が展開されている。その展開の中でも何と言ってもルーシーで代表される390-300万年前に東アフリカのサヴァンナを徘徊した我々の直系祖先の A. afarensis とはどんな猿人であったのかが中心となっている。絶滅寸前の厳しい自然環境の中で、昼間は肉食動物の残した草食動物の骨髄を石で割ってすすり、夜は外敵にびくびくしながら木の上に寝床を構えて細々と生き長らえてきた我々の祖先のことを思うと胸が苦しくなる読者も居ることだろう。更にこの種を引き継ぎ始めて石器を持ったと考えられる約260-160万年前の Homo habilis、そして100万年前に出アフリカ I を成し世界の多くの地域に足跡を残した190-10万年前の Homo erectus と話しが進む。そして10万年前に出アフリカ II をなし全世界にその人口を拡大した19万年前-現在の Home sapiens へと議論がすすむ。

著者らは、我々の感性、知性、そして言語の発達など頭脳の発達なくしては考えられない複雑な特性をも化石の形態や言語学などを通して解析を試みている。我々がこの有限の地球環境の中で平和で豊かな生活を少しでも長く持続させるためには、本書で述べられているような基本的知識と考察を読者自身が咀嚼した上で、我々自身の存在意義と将来を真剣に考える必要があるのではなかろうか？

（たかはし　こうぞう　理学部教授）

新入生に薦める本

山本七平著『日本的革命の哲学』

清　水　昭比古

「若者の読むべき百冊」のようなリストは昔からあって「これくらいは読んでおかねば」という強迫観念を学生にそれとなく植付ける。筆者もその昔強迫されて一応挑戦した。しかし、恥ずかしながら当時、大半は読んで理解できなかったし面白くもなかった。ゲーテの「ヴィルヘルムマイステル」やロマンロランの「ジャン・クリストフ」などを、これは勉強だ、義務だ、修行だ、と思いつつ読んだがそのあまりの長さに辟易し、苦痛だったという思い出以外何も残っていない。同じ外国ものでも少年期には「巌窟王」や「三銃士」や「プルターク」などをそれこそ寝食忘れて読んでいたのに、少し程度が高くなると理解できないのは畢竟お前のレベルが低いのだ、と密かに悩んだ。なに、訳が下手なのだ、と気付くのに十年かかった。件の強迫観念も実は出版社の陰謀と知った。バレンタインデーはチョコレート屋の陰謀、にわか信者のクリスマスはケーキ屋の陰謀だ。岩波文庫の奥付の人を見下した高慢な文章など、思い出すだに胸糞が悪い。「ヴィルヘルムマイステル」と「ジャン・クリストフ」は分類上青春小説だそうだ。それなら「宮本武蔵」、「人生劇場」、「青春の門」を先に読んでなお余力があれば読めばよく、厭になったらやめればよい。「若者の読むべき・・・」の大半は理解できなかったが「ソクラテスの弁明」だけは理解できてなるほどと思った。お前は無知だと知るべきだ、というから自分にぴったりだったのだ。

度し難いものに大学入試の現代国語がある。分かる文章では採点して差がつかないのでわざと分からぬものを選ぶ。読んで分からぬ文を悪文という。入試に採り上げられた作家は読まぬに限る。分かるもの、面白いものを沢山読め。ただし漫画は卒業しろ。漫画を全部否定するのではない。漫画を読んで本を読まぬから言うのだ。なに？、漫画しか分からぬ。一刻も早く退学したまえ。

さて、標記の「日本的革命の哲学」である。読んだのは初版が出てすぐの昭和五十七年で筆者は三十三歳だったから、はたち前後の若者に薦めるに相応しいかどうか自信はない。しかし、少なくともそのとき文字通り「目から鱗」が落ちた。筆者のはたちの頃、日本は、特に大学は価値観の混迷の極にあった。もっと早く読んでおけば、とは言うても仕方がない。出来たての初版を読んだのだから。

舞台は年月を遡ること七百八十年の遙かな昔、鎌倉時代初期の朝幕関係である。そこに承久の乱という大事件が勃発し、北条泰時と明恵上人という二人の興味深い人物が登場する。そんな遠い話をなぜ今、と思うかもしれないが、序文はいきなりこう始まる。「いったい『象徴天皇制』はだれが創り出したのであろうか。もちろんこれが出来たのは戦後ではなく、明治以前の日本は現在以上に徹底した象徴天皇制であった。」

筆者は五十路も近い今、日本の歴史は汚辱に満ち溢れている、とのみ言いつのる人々とは口も利きたくないでいる。本書のテーマは、日本人は如何にして日本人になったか、である。祖先の営みに共感して救われたい人はこの書を読むべきである。無論、承久の乱という大事件の顚末を、たとえば「龍馬がゆく」を読んで明治維新を知るように読むこともできる。しかし、たとえば三世一身の法や墾田永世私財法など、日本史の時間に覚えさせられた化石のような言葉にすら「ああそうだったのか」と意味を見出すだろう。全編これ「ああそうだったのか」の連続なのだ。鎌倉武士に一人立ち向かう明恵上人の姿は感動的である。泰時は、上人の助言のもとに、結果的に乱鎮定後の七百年を規定した貞永式目の制定に取り掛かる。今に残る条文は当時の人々の喜び、悲しみを生き生きと写し出している。読者は、人間の実相は今も変わっていない、と気付くだろう。泰時が亡くなった時、鎌倉はその死を悼む民草の葬列がいつまでも続いたという。

著者の山本七平氏は「山本日本学」とも言うべき独特の世界を切り拓いた。なかでも北条泰時の再発見は氏の最大の功績とされる。多くの大学人をして「残念だが大学にこれほどの碩学はいない」と嘆息せしめた超人であったが、平成三年、惜しまれつつ亡くなった。

（しみず　あきひこ　大学院総合理工学研究科教授）

新入生に薦める本

心に刻むこと―『岩波ブックレット』

柴　田　　篤

「心に刻むというのは、ある出来事が自らの内面の一部となるよう、これを信誠かつ純粋に思い浮かべることであります。そのためには、われわれが真実を求めることが大いに必要とされます。…罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。」

これは西ドイツのヴァイツゼッカー大統領(当時)が1985年のドイツ敗戦40周年の日に行った有名な演説の一節である。その全文翻訳を『荒れ野の40年』という題の1冊(No.55)として収録しているのが「岩波ブックレット」(岩波書店発行)である。1982年4月以来、毎月2～3冊の割合で刊行され、本年2月で474(別刊33)冊を数える。

1982年と言えば、世界的に反核平和の運動がうねりを見せた年であった。創刊号は「反核―私たちは読み訴える・核戦争の危機を訴える文学者の声明」で、核兵器廃絶・平和の叫び声がこのシリーズの原点であったことがわかる。以来「ブックレット」は平和の問題から目をそらさず、現実を見つめ、また過去へと向かう。特に「南京大虐殺」「ベトナム戦争と日本」等を含む別刊「シリーズ昭和史」14冊は、日本の近現代を捉え直すための導き手となるし、「アジアから見たナガサキ―被害と加害―」(No.157)、「いのちの重さ―声なき民の昭和史―」(No.126)は歴史を見つめ直すヒントを私たちに与えてくれる。

「ブックレット」はしばしばその時に問題となったことがらを取り上げてきた。86年「チェルノブイリの放射能」(No.74)、90年「学校と日の丸・君が代」(No.171)、91年「らい予防法の改正を」(No.199)、95年「薬害エイズ」(No.373)、96年「オウム裁判を読む」(No.408)、97年「阪神・淡路大震災の教訓」(No.420)。内容は多岐にわたるが、決して一過性のものではなく、あたかも万華鏡のごとく私たちを取り巻く現代社会の多様な問題点を映しだす。そして私たちが切り捨てたり目を背けたりしていることがらについて、時に鋭く警鐘を鳴らす。ここでは沖縄の問題を取り上げる。

「昭和史のなかの沖縄」(No.135)では、沖縄の苦難の歴史と共に、「本土と沖縄の埋めがたい裂け目」が指摘される。沖縄戦について沖縄の「一般住民が目撃した戦場の実相が本土にはほとんど伝えられてない」という事実に愕然とする。「沖縄・チビチリガマの“集団自決”」(No.246)は、「集団強制死」の真相を実態調査に基づいて伝える。それは「集団強制死」に至る「『殺して死ぬ』という非人間的な教育をされたのは、沖縄だけの特殊事情ではなく、全国民だった」という事実をも浮き彫りにする。戦後日本は自らの安全のために沖縄に米軍基地を認めた。「核・安保・沖縄」(No.415)では「日本の政府は何をしてきたか」とその歴史と現状を問い、「沖縄は主張する」(No.397)では、「他人を踏み台にして自分の繁栄とか幸せをはかるという感覚が、我々には理解できない」と鋭く矛先を向ける。愛の対極にあるのは無関心であり、無知が無関心を生む。「われわれ全員」が負うべきこと、「心に刻む」べきことがここにある。

最後に、「ブックレット」が一貫して心を配ってきたテーマに、子どもたちの問題がある。健康、ハンディ、いじめ、暴力、虐待、権利、環境―子どもたちこそ私たちの未来そのものであり、子どもたちに関わるすべての事がらに私たち全員が責任を負っていると考えているからである。

私たちはそれぞれの関心や必要の中で様々なことがらを学びかつ考え、行動する。ただ、それが何であろうと、私たちはこの現実の世界から離れることはできないし、今日までの歴史を無視することもできない。日本の現実を正しく理解し、世界の現実へと目を向けていくこと。過去を捉え直しつつ、未来の問題を考えていくこと。「ブックレット」は日常生活の中で私たちが本当に心に刻むべきことが何であるのかについて、やさしく語りかけてくれる。A5サイズ、平均60～70頁の、どこででも手軽に読めるこの一冊は誠に得難いものである。(紙面の都合で著者名を省略したことをお詫びします。)

(しばた　あつし　文学部教授)

先輩から新入生のみなさんへ

比較社会文化研究科　博士課程Ⅰ年　**内　田　友　子**

いわゆるアムロブーツの靴底が、六本松図書館の階段をゴットンゴットンと高らかに打ち鳴らしていた時期も過ぎ、今度は赤や緑や、中には七色に染めわけた努力賞ものの頭が館内を静かに右往左往するようになった。この流行の変遷には、カウンターの中でひそかに胸をなでおろしている。

元来、図書館とは静寂の空間だ。高校時代、友達と恋愛談義に白熱しすぎて係の先生につまみだされた経験を持つ私は、それ以来図書館では筆談を鉄則としてきた。専用のメモ用紙もちゃんと大量に持ち込んだ。

図書館とは、雑踏から隔離された「知」の未体験空間だ、と誰かが言った。髪が七色だろうがまぶたが白塗りだろうが、人は静寂のなかで沈黙に陥った時こそ、たった一人でさまざまな発見に出くわすのだ。

「生きたものを近付けずに、紙の臭を嗅ぎながら、一読んでみたい。けれども何を読むかに至っては、別に判然した考えがない。読んでみなければ分からないが、何かあの奥に沢山ありそうに思う。」

一年生の「三四郎」が東大の図書館に初めて足を踏み入れた場面である。「判然した考え」をもって本にたちむかう場合はたいてい単位のことで胸が苦しかったりする時だが、そうでない場合は、「何かあの奥に沢山ありそう」の気分で館内を探検してみよう。薄暗い書庫に降りればセピア色の大海に潜ってタイムスリップを体感するかもしれないし、ブラウジングルームでは心地よいソファに埋もれ、バイトの時間も忘れて「じゃりんこチエ」の完全読破に挑戦してもいい。しかも六本松図書館では、ＡＶ室で仲代達矢のシブイ演技にため息をもらすことだってできる。これは三四郎でも絶対やっていない。

でも図書館の中って、携帯電話を使うなとか飲食するなとか、けっこうウルサイから、ちょっとね…と言う人もいるだろう。もちろん人間だからデートの約束もあるしお腹もすく。しかし繰り返すが、図書館は「知」の未体験空間。だからこそぜひ、ハングリーでひとりぼっちのあなたでいて欲しい。

ちなみに三四郎は、どんなに難解な本にも先人が読んだ証拠としての書き込みや傍線を発見し、伝統の重みに感嘆しているが、開架図書への書き込みは厳禁なので、みなさんは真似しないように。

医療技術短期大学部　看護科2年　**中　野　理　恵**

図書館でバイトをはじめて１年半。私はたくさんのことに気づきました。まず、図書館は本当に便利なところであるということです。図書館には、数えきれないくらいの本があり、それらの本でレポートやほとんどの調べ物をすることができると思います。時には自分の見たい本が置いていないこともありますが、どうしても見つからない時には、１階のカウンターにいる職員の方か私達バイト生に聞いて下さい。そうすれば、その本がこの図書館にあるのかないのか、貸出中かそうでないかくらいは調べることができます。

次に気づいたことは図書館には、勉強する環境が整っているということです。また勉強に疲れた時、ひと息いれることのできる場所もあります。図書館は静かで、みんなが一生懸命やっているので、私も頑張らなければならないと勉強意欲を高めることができるところだと思います。（かえって、そうゆう環境がダメだという

人もいると思いますが)

図書館でバイトをしていて気づいたことはまだまだありますが、ここでは全てを述べることができません。だから、あなたも一度図書館に来て一日すごせば色々なことに気づいて、きっと図書館が好きになるのではないでしょうか。

講演会及び研修会を開催

前号(Vol.34, No.3)で報告された秦ソウル大学校中央図書館長の講演会のほかに、次のような講演会を開催し、学内だけではなく学外からも多数の聴講者が参加した。また、図書系職員を対象に研修会も開催し、いずれも、これからの大学図書館を考えていくうえで指針となる有意義な内容であった。

図書館職員講演会(会場:附属図書館4階視聴覚室)

○「電子図書館時代の著作権」

講師:黒澤節男(九州芸術工科大学教授)

日時:平成10年12月21日(月) 午後3時30分から

○「大学図書館の近未来像」

講師:倉橋英逸(関西大学教授)

○「諸外国における電子図書館について」

講師:枚本重雄(図書館情報大学助教授)

以上日時:平成11年1月28日(木) 午後1時30分から

○「これからの大学図書館の建設と設備」

講師:植松貞夫(図書館情報大学教授)

日時:平成11年2月4日(木) 午後1時30分から

図書館職員研修会(会場:附属図書館4階会議室)

○「オンラインジャーナルの現状について」

講師:佐藤義則(東北大学附属図書館 参考調査掛長)

○「カリフォルニアディジタルライブラリー」

講師:大西直樹(大阪大学附属図書館 参考調査掛長)

○「アメリカの大学図書館におけるコレクション形成について」

講師:大瀧礼二(九州大学医学分館 参考調査掛)

以上日時:平成11年1月12日(火) 午後1時から

平成11年度 附属図書館開館等スケジュールについて

中央図書館、医学分館、六本松分館の平成11年度の開館スケジュールは下記のとおりです。
なお、各館の利用案内、開館カレンダー等、詳しくは下記の図書館ホームページをご覧下さい。

http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html

所在地及び利用時間等

		中央図書館	医学分館	六本松分館
所在地	住所・電話	福岡市東区箱崎6-10-1 (092)642-内線番号	福岡市東区馬出3-1-1 (092)642-内線番号	福岡市中央区六本松4-2-1 (092)726-内線番号
利用	開館期間	平成11年4月2日～ 平成12年3月31日	平成11年4月1日～ 平成12年3月31日	平成11年4月2日～ 平成12年3月30日
	開館時間			
	平日	9：00-20：00	9：00-21：00	9：00-20：00
	土・日・祝日	10：30-18：00	9：30-17：00	10：00-17：00
	＊短縮開館時	9：00-17：00		9：00-17：00
	＊延長開館			9：00-21：00
お問い合わせ	電話 閲覧(貸出返却) レファレンス 文献複写 Facsimile	 (092)642-2337 〃 2338 〃 2334 (092)642-2340	 (092)642-6037 〃 6040 〃 6039 (092)642-6042	 (092)726-4810 〃 4551 〃 4552 (092)726-4811
備考	＊短縮開館：中央図書館（春季休業期及び8月の平日） 六本松分館（7月16日～8月31日及び平成12年2月21日～3月30日の平日） ＊延長開館：六本松分館（前期、後期の定期試験一週間前～試験期間中）			

休館日

休閉館日	休閉館する図書館及び期間		
	中央図書館	医学分館	六本松分館
月初めの平日(書庫整理等)	休館		休館
春期休業期の土、日曜日	休館		
曝書、図書点検期間(8月中旬の1週間)	休館 8月9日～8月13日	休館 8月7日～8月15日	休館 8月9日～8月13日
8月中の土曜、日曜日	休館		休館
年末・年始	休館 12月28日～1月4日	休館 12月28日～1月4日	休館 12月28日～1月4日
大学入試センター試験			休館 1月15日～1月16日
入学者選抜個別学力検査			休館 2月25日～2月26日
年度末図書点検			休館 3月21日～3月24日 休館3月27日～3月29、31日

その他、やむを得ず休館や開館時間を変更する場合がありますので、ご注意ください。
その場合、事前に図書館掲示板、広報等でお知らせします。

時間外及び休日開館時のサービス業務

時間外（平日の午後5時以降）及び休日開館時におけるサービス業務は各館とも以下のとおりです。

実施するサービス業務	備　　考
一般資料閲覧	
一般資料の貸出・返却	
館内複写	
プリペイドカード方式	
コイン方式	（六本松分館不可）
情報検索	
目録検索	
CD-ROM サーバシステム	
留学生用端末	
図書館利用者票	
申請受付	（中央図書館、六本松分館不可）
交付	
演習室の利用	（医学分館、六本松分館不可）

注：レファレンス業務等時間外は実施していない業務もあります

休日における図書館利用状況（平成9年度）

	中央図書館		六本松分館		医学分館	
開館日	土・日・祝日		土・日のみ（祝日は除く）		試験期のみ	
	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数
4月	2,029人	7日	334人	6日		
5月	2,834人	8日	609人	6日		
6月	2,805人	8日	768人	8日	27人	1日
7月	3,079人	9日	983人	7日	42人	2日
8月						
9月	5,891人	9日	3,572人	8日	612人	4日
10月	2,302人	9日	486人	8日	42人	1日
11月	3,086人	12日	637人	8日	88人	1日
12月	1,719人	7日	417人	6日	120人	2日
1月	2,548人	8日	1,063人	5日		
2月	6,151人	9日	2,454人	8日	886人	5日
3月	2,054人	9日	236人	5日	222人	2日
合計	34,498人	95日	11,559人	75日	2,039人	18日
1日平均	363人		154人		113人	

人事異動

（平成10年12月～平成11年２月）

（中央図書館）

1．1　川野　茂美　情報管理課長（情報サービス課長）

〃　田中　榮博　情報サービス課長（名古屋大学附属図書館情報システム課長）

〃　山下　谷治　熊本大学附属図書館事務部長（情報管理課長）

（生体防御医学研究所）

2．1　上田　大輔　管理掛（情報サービス課参考調査掛）

図書館日誌

（平成10年12月～平成11年２月）

12．7　平成10年度第4回分館長会議

8　学術情報基盤整備の在り方ワークショップ（学術情報センター）

14　図書館情報システム検討ワーキンググループ研修会

16　NACSIS-IR 地域講習会担当者連絡会議（学術情報センター）

17　図書資料の分類法の統一に関する検討会議

17　全学図書系掛長会議

21　講演会「電子図書館時代の著作権」（中央図書館）
（講師：九州芸術工科大学　黒澤節男教授）

22　九州地区大学図書館協議会幹事館・副幹事館会議

28　仕事納め

1．4　仕事始め

8　ソウル大学校中央図書館視察（有川館長、熊谷事務部長、深川閲覧掛長、古賀電子情報掛長）

12　平成10年度図書館職員等研修会

18　ILL システム地域講習会担当者連絡会議（学術情報センター）

20　図書館情報編集委員会

21　国立大学附属図書館事務部長会議（三重大学）

21　福岡県・佐賀県大学図書館協議会平成10年度第2回福岡地区研究会（西南大学）

21　第2回ラテン語研修会（中央図書館）

25　HighWire セミナー（Stanford 大学　Jim Hydock 氏　講演）（中央図書館）

26　大韓民国　朴元ハンガリー大使他来館

28　講演会「大学図書館の近未来像」（中央図書館）
（講師：関西大学　倉橋英逸教授）

28　講演会「諸外国における電子図書館について」（中央図書館）
（講師：図書館情報大学　枚本重雄助教授）

2．1　第１回事務処理標準マニュアル作成ワーキンググループ会議

4　講演会「これからの大学図書館の建設と設備」（中央図書館）
（講師：図書館情報大学　植松貞夫教授）

5　平成10年度第５回分館長会議

5　第168回附属図書館商議委員会

18　第2回事務処理標準マニュアル作成ワーキンググループ会議

22　平成10年度第３回研究開発室懇談会

23　第３回事務処理標準マニュアル作成ワーキンググループ会議

26　図書資料の分類法の統一に関する検討会議

26　全学図書系掛長会議

自著紹介

五十川直行・伊藤昌司・植田信広・児玉寛（法学部教授）
『図説判決原本の遺産』

［法学部図書室　Rj 50/H/10］

明治初年から昭和18年までの「民事判決原本」が、当初予定されていた廃棄処分を免れて、本学法学部を含む国立十大学法学部に一時保管されることになったことは、記憶に新しいところであろう。本書は、これら十大学に保管されている膨大な民事判決原本のなかから、特に興味深い判決原本を写真をフルに活用して紹介することを通じて、判決原本保管の意義について多くの人々の理解を求めようという趣旨のもとに企画され、十大学の関係スタッフ一同の共同執筆によって刊行されたものである。100頁そこそこの小冊子ではあるが、判決原本が明治・大正・昭和という日本の近代化過程における法・裁判制度や日本社会の変遷を理解するための貴重な資料であることを伝えるに十分な出来映えのものとなったのではないかと自負している。本書刊行を契機に判決原本の恒久保存への道が一歩でも前進することを著者一同心から願っている。

（図書館情報　Vol.33，No.3．1998も参照されたい）

本学関係者著作寄贈図書

蔵書の充実を図るため、図書館では著作物刊行の節は一部ご寄贈くださるようお願いしております。今回は次の教官からご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

〔中央図書館〕

中尾充宏（数理学研究科教授）山本野人（数理学研究科講師）

「精度保証付き数値計算：コンピュータによる無限への挑戦」

中尾充宏、山本野人共著

日本評論社　1998

［中央図書館　418.1/N 41］

〔法学部〕

五十川直行・伊藤昌司・植田信広・児玉寛（法学部教授）

「図説判決原本の遺産」

林家礼二、石井紫郎、青山善充編

信山社出版　1998

［法学部図書室　Rj 50/H/10］

九州大学附属図書館ホームページにアクセスしてみよう！

http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html

図書館利用案内、資料検索・閲覧（OPAC や Webcat）、CD サーバによるデータベース検索（Current Contents、MEDLINE、ERIC、PsycLIT、CA on CD、医学中央雑誌、雑誌記事索引）、Web of Science: SCI などが利用できます。

九州大学附属図書館報「図書館情報」　Vol.34，No.4（通巻190号）
編集発行　九州大学附属図書館　1999年3月31日
〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号　電話(092)642-2336（ダイヤルイン）